

会 議 録

会議の名称	平成30年度第3回富士見市社会教育委員会議
開催日時	平成30年7月12日（木）午後7時～9時
開催場所	教育委員会 会議室
出席者	搦木道代議長、荒川照子委員、板橋三宏委員、京谷恵子委員、 佐々木眞理子委員、古澤立巳委員、吉田徹子委員、吉田廣子 委員 事務局
欠席者	本間雄一副議長、岡野雅一委員
公開・非公開	公開（傍聴人 0人）
会議次第	1 協議事項 ・ハイティーン世代の事業事例 2 報告及び連絡事項
会議資料	定期刊行物
会議録確認	搦木道代委員

会 議 内 容 (要点記録)

1. 開 会

○議長あいさつ

2. 協議事項

・ハイティーン世代の事業事例

【議長】 前回会議時の課題を提出してもらっているのので、それをベースに進めたい。また、作成した表も生かしながら、ハイティーンの実態が見えてくるような議論を行っていきたい。順番に説明を。

【委員】 戸田市の事例を調べてみた。市の規模としては、富士見市と大体同じくらい。小学校12校、中学校6校と校数も近い。競艇があり、財源としては大きく、いろんな団体が市の事業に対して協賛という形で支援を行っているという印象がある。青少年の居場所づくりを支援している活動があるが、そのボランティアスタッフとして、大学生などがきている。また、成人式の企画運営を行うスタッフとして、新成人や前年度新成人であった人が、実行委員会を作っている。「三市青少年の船」という戸田競艇企業団からの支援の元、継続されている事業では、3泊4日で式根島に小学生が行くが、その小学生たちをまとめるのが、ハイティーン世代から、30代くらいまでの人である。過去に自らが小学生の時にこの事業に参加し、経験のある人が現在事業をまとめている。他にも、まつりや子ども大学など、大学生が中心となり事業に参加している例が多かった。

【委員】 相模原市と河内長野市（大阪府）の事例を調べてみた。両市とも、青少年のための活動センターがある。きちんとした活動拠点があると、事業が継続されるのではないかというのは感じた。相模原市については、指導者（ジュニアリーダー）の研修や養成を行っていた。河内長野市では、高校生から30歳くらいまでの方の団体が2つあり、それぞれが市民交流センターや青少年センターを拠点に事業展開している。「箱もの」の有無で内容は変わってくると思うが、富士見市の場合は、青少年に特化したものはないため、公民館や交流センターがその役割を担うと思われる。時代の流れと共に、価値観も変化し、多様な生き方の選択が可能になってきているので、多くの人との関係性の中で考えられるような、安心できる青少年の居場所というのが、求められていると感じる。青少年が主体となる事業への参加に加えて、青少年がボランティア、手伝いのような役割として、事業や地域に出て行けるような機会が増えると、より主体的になってくるのではと思う。

【委員】 公民館活動の中でも、若い世代の姿が少ないというのは、言われていた。事業への参加を考えても、高校生くらいになると地域から離れてしまうため、入りにくい傾向はあると思う。いろんな世代が関わるものとして、「お祭り」が挙げられる。その世代ごとにいろんな役割があり、巡ってくるイメージ。若い世代だけにターゲットをしぼって集めようとするのではなく、世代を網羅する中で、若い世代を取り込みたいと感じた。また、調べている中で成人年齢の引き下げの話が気になった。テレビのインタビューで、高校生が「いきなり成人と言われても・・・」と戸惑っている場面を見たことがある。社

会活動ができるように、その中で、若い世代の方が考えられる環境を大人の側も整えていく必要があると感じた。

【委員】若者が減っている一方、引きこもりの方が増えているということで、企業の取り組みが取り上げられていたため、調べてみた。若者の就職が少ない屋根職人の業界では、生活資金や交通費を支給しながら、ビジネスマナーと屋根工事の技術を習得してもらい、終了後同社へ就職という仕組みを作っている。東京の中小企業では、「わかもの就労ネットワーク」という組織を設立して、職場体験や就労支援を行っている。また、全国に175か所設けている「地域若者サポートステーション」についても気になったので、今後調べてみた。埼玉県では5か所あるとのことで、15歳から39歳を対象としているが、川口市のサポートステーションだけは、15歳から44歳までを対象としており、年齢が高くなっていた。横浜のサポートステーションの事例では、自ら発達障害かもしれないと思い込んだことがきっかけで、引きこもりになり、そこからの就職につながるまでの支援が載っていた。富士見市の場合だと、どのような支援が可能なのか知りたいと感じた。

【委員】中学生までだと、適応指導教室の「あすなろ」がある。

【事務局】義務教育中は、教育相談室が窓口だと思うが、その年齢を離れると障害福祉課や子ども未来応援センターなどになると思われる。就労支援だと、産業振興課が行っている。

【委員】ケースにより様々だと思われるため、相談窓口にあたるどころの職員の話聞いてみたいと感じる。

【委員】引きこもりの場合だと、学校を離れてしまうと見えにくい現状があると思う。

【委員】ホームページで調べてみたら、神奈川県が各市の事例をまとめているものがあつた。富士見市でみられる同様のものもあれば、独自のものなど様々。「居場所」をキーワードに関わりの中でいろんなものを学び取って、ネットワークを広げているというのが印象的だった。

【委員】子ども食堂は、富士見市でも行われている。実際に参加している子どもたちが、「楽しかった」「嬉しかった」など、プラスのイメージをもってくれていると、今度手伝いの側になった時に、参加してくれると思う。また、受け入れる側も、それら世代の子たちが参加しやすい受け入れ態勢を整えることが大切と感じる。

【事務局】前回会議の時に、ふじみ野駅東口のバスケットコートの話がでた。青少年の広場で検索をしたところ、茅ヶ崎市の事例があつた。遊びの場として、地権者の方から市が無償で借り、市民に提供をしていた。使用の条件は付与されているが、場所の提供としては非常に有効と思った。仕組みとしては参考になった。

【委員】いろんな事例がでてきたが、ハイティーンも目に見える部分と見えない部分がある。今後のまとめ方について、意見をもらいたい。

【委員】箱モノの有無によって、自治体でかなり違いがあるようにも感じた。富士見市は青少年センターのようなものはないが、青少年に対し、いろんな事業を行ってきた歴史もある。過去に行ってきた大人が、今は高齢になっている現状は課題として残るが、一本釣りではないが、興味を持ってくれる人を一人でも多くつくり、参加を促していく方法がよいと感じている。

- 【委員】拠点場所をつくることや、運営スタッフを呼び込むことも、かなり時間を要する。
- 【委員】出された事例をみていると、子ども会の役割が大きいと感じるものがあった。富士見市では、子ども会がない地域もあると聞いたが、いろんな地域事業に参加した小学生が楽しかったと実感しても、中学生になると部活動などが忙しくなり、地域に参加できない現状がある。子ども会があると、小学校高学年の時にジュニアリーダー研修などをやり、それをきっかけとして、中高生へとつながっている例が印象的だった。
- 【委員】今まで、グランドゴルフのイベントで昼食のおにぎりづくりを婦人会の方にお願ひするなどして用意をしていた。しかし、参加者の保護者に頼むようにしたところ、それをみていた公民館利用者の大人の方から、「みんなとても楽しそうね」と話された。実際の参加者の方と事業を行うことで、今後につながる一歩と感じた。
- 【委員】昔、青年団や婦人会があったころは本当に地域活動がさかんで、今、地域のいろんな役についている方が多い。若い方の参加が少なくなったという現実があり、今南畑公民館が拠点となり、いろんな方が積極的に取り組もうとしていて、公民館まつりや菜の花フェスタ、農業祭でも、本当に若い子育て世代の方の参加が増えたと感じている。
- 【委員】ボランティア活動や職場体験などが中学校の授業に入っている。そのため、抵抗なくボランティアを行う子が増えているのかもしれないが、それをきっかけに福祉関係の職業に就いた子がいる。何事もきっかけが大事ではないか。
- 【委員】文化協会では踊りのグループがたくさんあり、次世代へつなげるために、学校で小学生などに教えられないかとお願ひに行っている。学校がとても忙しいことは承知しているが、少しでも「富士見がふるさと」の踊りを知ってもらうことで、その後、ふるさとを感じてもらえる、伝統文化を感じてもらえる、そういうことにつながれば嬉しいと思う。学校には時間を作っていただいて感謝しているが、小学生に教えると、踊りをしている側も、ものすごい元気をもらえる。
- 【委員】まとめ方の話だが、前回の資料の4分割にした図でいくと、これらを一緒に考えるのではなく、わけて考えていく方がよいのではないか。
- 【委員】帰属があり、意欲もあるという場合は、行動力があれば何かしら参加もし活動もしている場合が多いと思う。一方で、帰属や意欲などどちらかが低い場合は、こちらの働きかけにより、変わっていくことが望まれるのではないかと感じる。
- 【委員】箱モノの話が出てきていたが、公民館やコミセンなどは拠点にならないか。
- 【委員】なり得ると思われるが、積極的な事業展開や夜間開放などがないと、厳しいのではないか。現実少ない。
- 【委員】水谷公民館などは、ちょうど青空学校がこれから始まるため、その準備で連日ハイティーンの指導者の役割を担う人たちが出入りしている。小学生は、その世代を対象とした事業を「来てください」という形で呼び込むスタンスだが、ハイティーンになると自分たちで考える、企画をするための公民館が居場所になっている。
- 【委員】ハイティーンは、いろいろ考えてやっていかなきゃいけない世代であるが、

自分のことで精いっぱいなのが現状。公民館は、今はどちらかというと、高齢者の方の利用が多い気がする。青少年センターのように、その人たちのための施設と銘打ってれば、何にでも活動するときには使える、居ていい場所という認識になると思うが、公民館は使っているのか、出入りしているのか、という部分から入ってしまうのではないか。今は、施設を予約して使用料を払わないと使えない。もっと、利用を促すための周知や開放をすることも必要と感じる。

【委員】 現実として、場所をとって使用料を払ってまでは、よほどの理由がないと行かないのではないか。フリースペースだと、行きやすくなる側面はある。

【委員】 先日コスモス街道のボランティアに行った。中学生も部活動で参加しており、子育て世代の方も参加されていたが、地域の役を担っている方が多かった。きっかけは何でもいいと思うので、参加があったことはとても喜ばしいことだが、今対象としているハイティーンを呼び込むということは、かなり仕組みやきっかけづくりを考えないと、ハードルは高いと思われた。

【委員】 全くの無からの状態から参加を募ることは難しいと感じるが、ハイティーンが来てくれている事業（例えば子ども食堂）などは、何かしら考えられると思う。しかし、「やってもらう人」「やってあげる人」のラインが引かれていると、例えば食器洗いひとつにしても、主体性などを考えるならば、ラインをなくしていくことが必要。

【委員】 ボランティアの参加なども、「やらされ感」できていると長続きしない。一緒にやって楽しかったから参加、というスタイルに変わってくると、継続されると感じる。

【委員】 地方の祭りでも、〇年生になったら××ができる、というのが、段階的に組まれているというのを聞いたことがある。その仕組みは、地域参加にも生かせるのではないかと思った。

【委員】 ひきこもりの例でも、やりたいけどやり方がわからないハイティーンもいれば、参加させる土壌を作れていない大人もいると思う。やれる人が増えてくる、子どもがいろんなことに巻き込まれてくるのが大事ではないか。

【委員】 水谷東地区の防災訓練で、中学生が「大丈夫ですか」と高齢者のお宅を訪問する練習があるが、とても生き生きしながらやっているが、高校生になると参加がみられなくなる傾向がある。また、陸上指導で、中学生が小学生に教えるがとても楽しそうにやっている。当時のその楽しい気持ちを継続できる仕組みがあるとよいと思うが、一方で中学を卒業すると、自分の時間というものとても大事になるという側面もあり、それが考える時間につながっているようにも思う。そのあとの、受け皿として何か地域や大人が用意できると良いと思うが、なかなかいいアイデアがないのが現状。

【委員】 踏み込む力を持った人が、もっと参加できる状態を作った方がいいのではないかと、地域貢献できる場面を作った方がいいのではないかと考えた。やはり地域から、ハイティーンの姿を見なくなっている現実には、実際起きているので、まずは機動力のあるハイティーンに参加してもらうことから始めるのがきっかけとしてよいのではないかと感じた。参加できる場を作ることで、そこに呼びかける、仕組みをつくった上で、ハイティーン世代を取り込んでいくというのがよいのではないかと。

【委員】 4分割の表でいうと、それぞれを分けて考えるのではなく、出てこれそうな層をまずは対象として、中間層を取り込んでいく仕組みづくりがよいと感じる。そこで、ネットワークができてくると、友達関係が構築される。友達は、われわれ大人がいうよりも、同世代でものすごい力を発揮することが多々ある。救われる・救える関係ができることが望ましいのではないか。

【議長】 まとめ方として、「より積極的にハイティーンを参加させるために」というようなイメージで考えていくことでよいか。また、4分割は便宜上設けているかたちで、結局はすべてが対象となっていくと思われるため、網羅する形でまとめていくという方向でよいか。

【委員】 よい。

次回は、若者支援について子ども未来応援センターの職員から話を聞くという形で会議を行う。

次回会議日程

平成30年度第2回会議

日程：平成30年9月5日（水）午後7時～

場所：教育委員会 会議室

3. 閉 会